

大正記念三田博物館と九鬼隆一

山口 卓也

2018年度・2019年度の特別研究「なにわ大阪と本山彦一」の研究分担者として、明治後半から大正、昭和初期に大阪毎日新聞社社長をつとめ、関西大学博物館所蔵の考古学資料「本山コレクション」を蒐集した本山彦一（1853（嘉永6）年8月10日～1932（昭和7）年12月30日）の研究に従事した。本山という人物は、大阪の財界人言論人、新聞経営者、藤田組支配人などの業績から多角的に評価され研究されてきた、明治大正から昭和初期のいわば立志伝中の著名人の一人といえる。一方、本山のさまざまな事績の中で考古学研究や学術研究支援の視点を含んでの論及はなく、私たちの思い描く人物像との間に乖離があった。

そこで、その隙間を埋めるべく、関西大学博物館にある本山彦一が蒐集した考古学コレクションを収めていた「富民協会農業博物館本山考古室」とはどんな存在だったか、そもそも本山の蒐集意図はどこにあったか、大阪にどのような貢献をしたか、その思想はどこに由来するかを解明しようと調査したのである。その成果として、本山彦一の福澤諭吉や慶應義塾閥とのかかわり、自助共助の思想と社会事業、皇室尊崇、自ら設置した財団法人富民協会の設立経緯や農業博物館設立の意図、考古趣味と学術支援などが明らかになってきた（関西大学なにわ大阪研究センター 2020）。

研究を進める中で、本山の推進した農業博物館という産業博物館や、地方博物館、私立博物館や美術館の成り立ちについての知見を得ることもできた。本稿では、その成果を補足して、本山彦一が富民協会に農業博物館を設けようとしたとき、さまざまに示唆を与えたであろう九鬼隆一という人物と私立有馬会が設けた大正記念三田博物館、有馬会の名誉会員田中芳男などについて紹介し、本山とのかかわりを考察してみたい。

帝國博物館総長 九鬼隆一

九鬼隆一は、日本の黎明期文化財保護制度や帝国博物館（今の東京・京都奈良国立博物館）を作りあげたことで知られる官僚であり、駐米特命大使、図書頭、臨時全国宝物取調委員長、宮中顧問官、帝国博物館総長、貴族院議員、枢密院顧問官などを歴任した。まず略歴を見てみる。

九鬼隆一は、1850（嘉永3）年、兵庫県有馬郡三田藩の家臣で180石取りの星崎貞幹の次男として藩内の屋敷町（現・兵庫県三田市）で生まれ、京都綾部藩家老九鬼家の養子となり、1866（慶應元）年に九鬼家の当主となる。三田藩の藩政改革に携わっていた福澤諭吉の知遇を得た。

1871（明治4）年2月に慶應義塾入塾、英語を学ぶ。この頃「九鬼静人」を改めて「九鬼隆一」と改名。1872（明治5）年4月文部省出仕。大学南校監事、大学東校事務主任などを務める。1873（明治6）年、欧州派遣留学生問題で欧米各国に派遣される。帰国後の1874（明治7）年に文部少丞、1876（明治9）年に奏任官文部大丞・一等法制官、1877（明治10）年には文部大書記官・太政官大書記官に任ぜられるなど、文部官僚として急速な昇進を遂げる。この年、パリ万博に派遣され、

1879（明治12）年まで滞在する。この頃から博覧会副総裁の松方正義、フェノロサや岡倉天心と交流して、九鬼の美術史研究や文化財への関与と支援がはじまり、全国各地で寺社などにある文化財調査が効率的に行われることとなった。1880（明治13）年に文部少輔（現在の事務次官）、続いて内国勸業博覧会審査副長と議官就任。権勢をふるって、「九鬼の文部省か、文部省の九鬼か」と呼ばれることがあったという。



図1 九鬼隆一

1881（明治14）年に自由民権運動を抑えつける「明治十四年の政変」が起きると、大隈重信や福澤諭吉の慶應義塾門下生が政府から辞職したが、九鬼は文部省に残留したことから、福澤や慶應義塾出身者大半との関係が断絶緊張することとなった。

1884（明治17）年に文部省を退官、特命全権公使としてアメリカ、ワシントンに赴任。公使館客間に数百の日本画を展示して日本の美術を紹介、さらに古美術品の海外流出防止の観点から国宝保存の必要性を文部省や宮内庁に進言した。1888（明治21）年帰国し、宮内庁図書頭となり、臨時全国宝物取調掛を設置して自ら委員長を務める。フェノロサと天心を委員として文化財の調査・保護に当たる。フェノロサとともに近畿地方社寺や美術品の調査を行う。

1889（明治22）年、東京京都奈良に帝国博物館（現在の国立博物館）が設立されて初代総長となる。1890（明治23）年、第3回内国勸業会審査総長。帝室技芸員を制定。帝国議会開設に伴い貴族院議員。1891（明治24）年、シカゴ万国博覧会準備副総裁を務め、工芸品の輸出を積極的に促進した。1892（明治25）年第2回衆院議員選挙で政府系候補の支援活動を行なった。1895（明治28）年第4回内国勸業博覧会の審査総長として、黒田清輝の裸体画「朝妝」の展示を許可。同年枢密顧問官。1896（明治29）年男爵叙任。

1897（明治30）年、古社寺保存法制定に尽力した。同年東京在住の兵庫県有馬郡出身者で作る有馬会会長に就任。1900（明治33）年帝國博物館総長を依願辞任。

同年、「地方博物館設立の必要なる理由」を、九鬼の出身である兵庫県有馬郡の在京同郷人雑誌「有馬会雑誌」第五号に発表。このころから体調を損なっていたという。1914（大正3）年、故郷有

馬郡の旧役所に自身の収蔵品を展示する大正記念三田博物館を設立する。

1920（大正9）年に議定官となり、枢密顧問官と議定官を務めたまま1931（昭和6）年8月18日に鎌倉で逝去した。

本山彦一との接点は、華やかな中央官僚としての活躍や顕職歴任に惑わされて、九鬼の側から観察することは難しいが、本山の伝記（故本山社長伝記編纂委員会 1937）や九鬼の葬儀の時の本山の弔辞（藤本 1951）などから見出せる。

九鬼は本山より3歳年長で、嘉永年間の生誕ではほぼ同世代、前後して慶応義塾で学んでいたことから、早くから面識があった。「明治一四年の政変」では、福澤と共に論陣を張った本山と、政府にとどまった九鬼とは袂を分かっていたが、本山が藤田組支配人を経て、大阪毎日新聞の経営にかかわるころになると、両者の接近がうかがえる。1901（明治34）年の福澤諭吉の死後少したって、1904（明治37）年、日露戦争時の「陸海軍人の忠勇及国民の熱烈なる後援」を、「後来国民教育の活模範」とするため、九鬼隆一が「忠勇顕彰会」を發起して自ら会長となったが、本山はその評議員をつとめている。九鬼も本山も、福澤門下にあつて際立った皇室尊崇者であったことが知られており、思想的な共鳴関係があったことも窺える。

1909（明治42）年、フェノロサー周忌供養のため三井寺円満院で開かれた絵画展発起人に岡倉覚三、高崎親章、益田孝らとともに両名で名を連ねたことがあって、美術工芸や古美術の分野でも交流があった。九鬼は、日露戦争後、達磨絵1万枚を描く大本願を立てて、晩年に実際1万3000枚もの達磨絵を残したが、その達磨絵の中に本山が賛を添えたものがある。1929（昭和4）年、九鬼は『達磨心論』を刊行する。

1923（大正12）年の関東大震災後、九鬼が設けた有馬会三田博物館の建物が老朽化したことを心配した本山は、耐震補強改築を進言した。震災による東京邸の焼失と1927（昭和2）年の松方一族の十五銀行破綻により財産を失った九鬼のプライドに配慮して、三田町長を介して支援したという（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p32）。晩年には貴族院議員の同僚ともなった。1928（昭和3）年、九鬼の記念銅像除幕式に参列して、体調不良の九鬼に代わり式事を取り仕切ったこともある（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p32）。

1931（昭和6）年8月、九鬼が逝去して葬儀が兵庫県有馬郡三田町心月院で行われた際の本山彦一の弔辞（藤本1951）には、「五十余年間に於ける先生の知遇、追懐すれば不肖彦一、只感泣の外あらず、或は東京に、或は鎌倉に、屢々先生を訪いて高教を仰ぐ、維新直後の政界談、或は先生得意の美術談、逢えば別るるを惜しみ、別るれば逢わん事を思ふ、その鎌倉に病まるるや、不肖彦一、先生の病床を訪うこと十数回、会談大率二時間以上に及ぶを常とせり」とあり、青春時代からの50年を超える親密な交流を回顧し、九鬼から長きにわたって教示されたことを告白する。また、本山の伝記にも、親しい間柄であったとの記載がある（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p32）。

さらに弔辞は、「先生亦晩年達磨図を画き、知己に頒たる、不詳彦一亦屢々その贈与を忝うし、一時に数十枚を算するを常とす」と述べ、その画力に賛辞を述べている。また、九鬼の許可を得てそれを知友に分ち、本山自身は「大画の一点、屏風として茅屋に秘蔵」した。本山が賛を添えた達磨絵は、この数十枚だったのだろうか。

九鬼隆一の「地方博物館設立の必要なる理由」

九鬼は兵庫県有馬郡出身であったが、中央文部官僚として栄達した傍ら、有馬郡在京同郷人の交

流があり、帝國博物館総長を辞任した1900（明治33）年、「地方博物館設立の必要なる理由」をその同郷人雑誌「有馬会雑誌」第五号誌面に発表する（有馬会 1900）。

有馬会は、1884（明治17）年東京在住の兵庫県有馬郡出身者の同郷親睦・在京学生支援のために、有馬郡在住教育者や医療や農業の篤志家などを含めて構成された団体として始まった。のちに兵庫県有馬郡にあった私立有馬衛生教育会と合流して、1903（明治36）年には本拠を兵庫県有馬郡に移して地元の有力者を取り込んで拡大再編成され、「私立有馬会」となった。

九鬼隆一は、1897（明治30）年から有馬会の会長に就任する。名誉会員には、九鬼家と縁戚であった川崎造船所社長で西洋美術コレクターとして著名な松方幸次郎や、明治初め上野に動物園植物園を設け、「博物館」という名称を生み出し、勸業博覧会、伊勢神宮農業館、農業教育で有名な田中芳男がいた（有馬会 1904）。

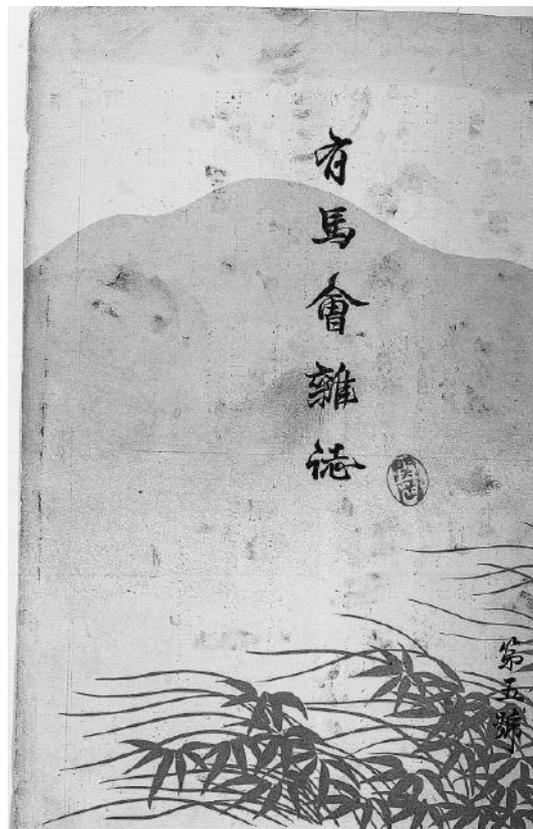


図2 有馬会雑誌第五号 1900年

掲載された九鬼の「地方博物館設立の必要なる理由」は、国など中央の博物館産業館博覧会に対置して、地方にもそれぞれに博物館が必要であるとして、理由を列挙している（以下要約）。

- ① 歴史上の必要：各地の独自の文化や歴史的遺物の保存・公開の必要
- ② 地方の産業上必要：都市化が進む中、地方色を維持するための展示場所・博物館が必要
- ③ 地方遺物の散逸防止：神社・寺院・旧家等からの名品の数々を収蔵・公開するため
- ④ 地方精神の維持：地方独自の精神や特質を維持するために偉人の顕彰や、遺物の保管・公開するため
- ⑤ 観光資源としての活用：地方博物館を設置することで、観光客の知識と快感を向上させる

- ⑥ 中央博物館との連携：地方博物館と中央博物館が相まって、日本の文化の保持発展につながり、世界へも発信できる

九鬼の構想は、官による大規模な中央博物館と同等価値あるものとして、それと補完関係にある地方博物館を構想したものであり、地方博物館のになう地域における機能と必要性を正当に評価したものであった。九鬼が帝国博物館総長を退いたのちに発表されたものであるが、この構想の先進性は明治の博物館黎明期にあって突出したものであり、従来の博物館史研究では欠落している事績であるので、その価値をここで強調しておきたい。

この1900（明治33）年当時、本山は大阪毎日新聞の業務担当社員であったが、交流は続いていただろう。「なにわ大阪と本山彦一」研究で明らかにしたように、1931（昭和6）年に九鬼が逝去してすぐ、財団法人富民協会と農業博物館を設立した構想は、九鬼の構想を、「有馬会」を「富民協会」に、「地方」を「農業産業」に置き換えたものと相似する構造であった。九鬼から本山が、「地方博物館」や「産業博物館」について教示を受ける機会が長くあったことが知れよう。

有馬会名誉会員 田中芳男

1903（明治36）年頃、有馬会名誉会員になった田中芳男（1838（天保9）年～1916（大正5）年）は（有馬会 1903）、幕末から明治期に活躍した博物学者、物産学者、農学者、農政学者、園芸学者、中央官僚である。略歴をみってみる。

1865（慶應元）年、幕府はパリ万国博覧会に正式参加するため昆虫標本の蒐集を田中に命じ、1866（慶応2）年採集を行ない、1867（慶応3）年、パリ万国博覧会に出張した。自ら採集した昆虫標本が現地の研究者に高く評価された。

1872（明治5）年、翌年開催のウイーン万国博覧会に明治政府が公式参加するため全国各地から取り寄せた出品予定品を、湯島聖堂大成殿で博覧会を開催して公開することとなり、これを担当した田中は、兵庫県有馬郡の竹細工を多数蒐集している。1873（明治6）年、湯島の展示品を携えてオーストリアで開催されたウイーン万国博覧会に出張する。1875（明治8）年、上野に博物館・動物園を建設するため、文部省や宮内庁で町田久成、九鬼らとともに尽力し、町田が初代博物館長、後を田中が就いた。農商務省博物局長を務める。

田中は、訳書『動物学初篇哺乳類』で、分類階級の訳語として、classに「綱」、orderに「目」、familyに「科」、genusに「属」、speciesに「種」の訳語を充てたことでも知られる。

1878（明治11）年に駒場農学校の設立に参画、1881（明治14）年、大日本農会結成に参画、翌年大日本水産会と大日本山林会の創設にも参画した。

1890（明治23）年、伊勢神宮神苑会が農業館を建設することを田中に依頼し、農学者農政学者としての知見を発揮して翌年開館させた。以後田中は農業館の運営と発展を担い、晩年まで伊勢に通った。

博物学、物産学、農学、農政の知見を請われて、明治35年に大日本農会附属私立東京高等農学校（現東京農業大学）校長に就任した。元老院議官、貴族院議員に就く。1915（大正4）年男爵叙爵。生涯、農林水産業や博物館、博覧会の発展振興につとめた。1916（大正5）年6月22日、東京本郷金助町で逝去した。

田中は、九鬼と文部省、宮内庁で上司下僚の関係にあった。町田久成とともに三人で日本の博物館や博覧会を作り上げた博物館史の人物でもある。町田と九鬼は、美術・文化財分野での博物館構

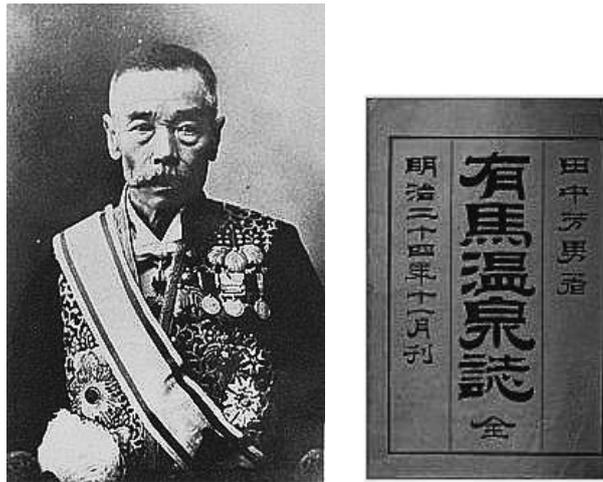


図4 田中芳男と有馬温泉誌

想を、田中は工芸や物産、動植物といった科学館や産業博物館・教育博物館構想と博覧会などでの殖産興業に事績が多い。この田中が、有馬会の名誉会員になったのは、九鬼の上司であったことと、有馬という地に関心があったことが考えられる。

田中は、1873（明治6）年のウイーン万国博覧会に出品するため、江戸時代から有名であった兵庫県有馬の竹細工を集めた（角山 2004）ことから、早くから有馬についての土地勘があったことがわかる。田中の手による有馬地方植物版画もある。伊勢神苑会の農業館運営に携わった頃には、有馬温泉にしばしば湯治に訪れており、1891（明治24）年に有馬温泉の歴史、鉱泉としての科学的調査などを載せた総合研究『有馬温泉誌』を刊行している（田中 1891）子息田中五一は、「父は一年の大半は旅行でしたが、温泉に行くのは有馬温泉だけでした」といったという（矢野 1979）。「旅行」は「出張」のことであろう。

有馬温泉は有馬郡有馬町にあるが、郡の中心が九鬼の出生地三田町であり、田中の有馬温泉での湯治や竹細工蒐集、植物研究のための往来は、そのまま九鬼との交流につながったとみえる。

九鬼が会長を務める私立有馬会会規則総則の定める活動（要約）には、

- ① 伝染病予防のための衛生知識の普及、衛生教育懇談会の開催（郡町村書記、町村長、巡査等の講演）
- ② 農業の質的向上、農業改良を図る（苗代競作会、水田の形状や区画の適正化、種まき・水入れ・施肥・害虫駆除の適切化）
- ③ 地域の歴史継承を重視し、地域行政や教育行政の当局者や地域の有力者をまとめて様々な事業を計画・実施
- ④ 図書館事業の推進
- ⑤ 小学校教員の質的向上のため、夏期講習会を開催

があった。

有馬会の会規則から読み取れるように、大阪近隣の兵庫県有馬郡で、教育者、医者や治安関係や有力者を核として、地域改善を目的とする事業をもつ有志団体有馬会の活動として、啓蒙普及、教育振興、青少年の健全な育成や図書館設置があるが、あわせて農業改良・種苗競作などを自ら行っていたことは興味深い。有馬会の活動対象に、田中の専門とする農学や農政、農業技術普及と教育

などまさに応用できる分野がある。田中の事績として、明治初期の博物館や博覧会、伊勢神宮農業館・農業教育への貢献が語られるが、この有馬会と兵庫県有馬郡への寄与について調査を進める必要があるだろう。

田中は、1911（大正5）年に逝去した。本山は九鬼と交流があり、田中にも刺激を受けた可能性が考えられるが、今のところ本山と田中の両名のはっきりした事績を発見できておらず、直接の接点があったかどうかはわかっていない。

九鬼隆一の三田博物館

九鬼は、中央博物館に対置・連携する地方博物館として、1914（大正3）年、郷里の兵庫県有馬三田地域の篤志家が作る有馬会を母体として、図書館に続いて大正記念三田博物館を設立する。大正天皇の即位を記念した命名であったという。建物は、旧有馬郡役所を改築した2階建て洋風造りで、九鬼が集めた伊藤若冲、雪舟らの日本画など絵画129、仏像14点、木札1点、古壺186点、平鉢18点、その他111点、約500点が展示され、入館料20銭であったという。

『三田博物館出陳図録』3巻と抄本1巻が発行されている（三田博物館 1915～1917）。いずれも便利堂のコロタイプ印刷で、九鬼が自叙を記し、東郷平八郎と加藤弘之が題辞、内藤湖南・今泉勇作・東京府知事井上友一・三上参次が序、鉄道院総裁添田寿一が跋を寄せている。1巻と2巻に九鬼所有の絵画など美術品多数を収録、3巻は前2巻所収の達磨絵が精選されて収録されている。九鬼の叙には、美術品を愛好すること、美術品を蒐集する真意は、「専ら研究を主とす」「断片をも捨てず、汚損せりともいへども厭ふ所なし」として、自身の美術品蒐集と研究の優越が明らかにされる。

内容的に三田博物館は、九鬼の「個人美術館」であったことがわかる図録である。九鬼は、官僚として岡倉天心やフェノロサに美術教育や研究基盤の整備を行わせ、自らも多くの著作がある美術史研究家であった。いわゆる数寄、茶人がおこなう骨董美術の展観鑑賞（斎藤 2012）とは異なる姿勢を一貫していたことがうかがえよう。茶席での美術展観を排しての三田博物館だったのかもしれない。実は本山彦一も、骨董美術や茶器の蒐集には精力的ではなく、考古学の研究的蒐集と学術研究支援の側面が強いことが今回の「なにわ大阪と本山彦一」研究で鮮明となったことから、九鬼と本山両者の蒐集姿勢には、強い共通性が認められる。

図録収録が展示物総てであったか確かめられないので、他に考古学や地域史、地元の産業や農業などの展示があったかは窺えない。また、1916（大正5）年に79歳で逝去した田中芳男の農業産業や植物などを反映した分野があったかも判明しない。私立有馬会の規則総則や、九鬼の「地方博物館設立ノ必要ナル理由」（1933年）の提言を反映したものではなく、あくまで九鬼の個人コレクションを「開陳」する構成だったようだ。地元有志団体の「地方博物館」大正記念三田博物館の展示内容が、実際に三田という地域の歴史や美術にもどこまで根差していたかは、今後研究の余地がある。有料であったことと、九鬼個人所有の美術品が中心であったことなどから、かならずしも入館者は多くなかったらしい。

九鬼は、晩年、東京に本宅、鎌倉と兵庫県有馬郡三田町に別宅を設けて、療養生活を続けた。見舞いに訪れる本山に三田博物館の運営と将来について相談をしていたことが、葬儀の際の本山の弔辞に述べられている。「先生、その創設にかかる三田博物館の将来に関しては、頗る関心あり、不肖彦一亦屢々相談を蒙る、しかも未だ充分の解決を見るに至らずして薨ぜらる、又遺憾なり」（藤本 1951）。昭和になって、本山は財団法人富民協会の設立と農業博物館開設の構想があつて、産業博物

館についての知見を蓄えつつあったのだろう。関東大震災後、三田博物館改築の援助をしたように、九鬼の三田博物館の将来について、助言や助力をする立場ともなっていたことがわかる。



図5 私立有馬会大正記念三田博物館



図6 九鬼隆一揮毫三田博物館の碑

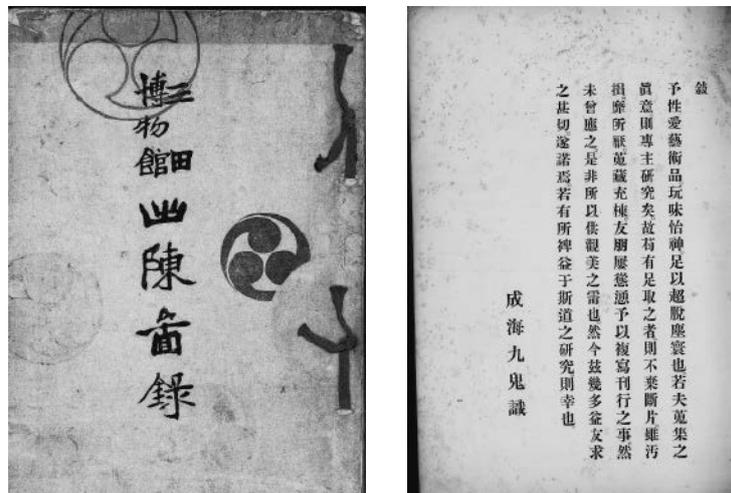


図7 三田博物館 出陳図録と九鬼隆一叙

九鬼は、関東大震災で東京の邸宅を焼失し、蒐集して東京に保管していた美術品の大半を失った。昭和恐慌では、松方の十五銀行破綻で損失を被っている。晩年には九鬼家はかなり経済的に逼塞していたとされ、隆一の死後すぐ1932（昭和7）年、京都美術倶楽部で入札品182点、売り立て品1200点余りが出品され、1936（昭和11）年には東京美術倶楽部に「男爵九鬼隆一翁遺愛品」として入札札、競売が行われたという（山本 2010）。三田博物館の将来について相談されていた本山も、1932（昭和7）年に死去した。1941（昭和16）年、三田博物館が閉館となり、展示されていた九鬼蒐集品を九鬼別邸に返還したが、人夫十数人を使って数日を要する展示品があったと伝えられる。この時点での展示品の内容はわからないのが残念である。

文部行政の中核にいる九鬼が、地方への積極的な視点を保持発想していたのは、九鬼が兵庫県有馬郡の出身であって、文部官僚時代から、ずっと地元への視点を保持し続けていたこと、途中で不仲となったとはいえ福澤諭吉門下特有のエトスを保持していたことがまさに想起できる。帝國博物館退任直後という九鬼の心情上微妙なタイミングであったとはいえ、1900（明治33）年に「地方博物館」の概念と機能を提示したことは、繰り返すが日本博物館史上、画期的な提言であった。

存命中の田中の名誉会員参加も寄与した可能性のある地方博物館「大正記念三田博物館」設立を行ったことは、有馬会の会規則総則に定める目的のためであって、中央政府の意図政策としての文部行政博物館行政の実行者として捉えられてきた九鬼隆一の、今まで知られていなかった、新しく見出された側面であろう。一方、有馬会会長でありながら、農業・農政に対する積極的な言及はないことも注意される。

本稿で俯瞰したように、「九鬼の有馬会と三田博物館」という構造は、今回の「なにわ大阪と本山彦一」研究が明らかにしたとおり、「本山の富民協会と農業博物館」の構造に先行する事例であるとも考えられるだろう。繰り返すが、この有馬会・三田博物館の事業として記された活動は、本山の富民協会や大阪毎日新慈善団の事業範囲と一致する活動が多く認められ、本山が九鬼や有馬会の活動から吸収した部分があると考えられる。

後藤新平と横井時敬博士を顧問、井原百介を理事として、九鬼逝去後の1932（昭和7）年に、本山の私財を投じて、財団法人富民協会が設立された。本山には、九鬼との50年を超える親交の中で触発され、田中の農政や農学への残滓の残る私立有馬会の現場を確かめた理念発想が、富民協会、農業博物館という事業施策に反映されることもあっただろう。本山が農業博物館を設けること発想したのは、田中や九鬼と同様に、訪欧の時に博物館や産業博物館、勸業博覧会の機能を正しく認識した福澤諭吉から伏流する思想的系譜、無意識有意識両方の目的意識共有が、いくらかでも反映したのではなかろうか。

箕面有馬電気軌道

有馬・三田は、本山にとってどのような場所だったろうか。本山彦一と交流のあった慶應義塾出身者小林一三について触れて、本稿の締めとしたい。小林一三は、1910（明治43）年、箕面有馬電気軌道の梅田駅宝塚駅間を開通させる。鉄道名にあるように、最終的には、有馬温泉のある兵庫県有馬郡有馬町まで接続する計画があった。有馬は、九鬼隆一の出身地三田町、私立有馬会の本拠、田中芳男の通った有馬温泉の地である。有馬温泉まで電車を伸延する計画は、鉄道敷設計画立案当初からあったが、電車によって日帰り湯治ができるようになって宿泊客が減ることを危惧した温泉宿主の反対によって断念することとなった。小林は、有馬温泉にバスの運行で接続を果たす。

本山は、小林が1913（大正2）年に宝塚温泉のアトラクションとして始めた宝塚唱歌隊を、大阪毎日新聞慈善団のチャリティ公演に起用し、大阪毎日新聞慈善団の財政に寄与させた。この成功をみた小林は、この歌唱隊を発展させて常設劇場で有料公演を行うことを考案し、現在の宝塚歌劇団につながるというエピソードは有名である。

箕面有馬電気軌道の敷設と大阪毎日慈善団のチャリティ公演の年代は、九鬼が有馬会の会長として有馬郡の地域振興にかかわり、図書館や博物館を設けていく時期に重なっている。本山と九鬼、本山と小林の交流は認められるが、九鬼と小林のしっかりした関係を今のところ発見できない。ただ、慶應義塾出身であることに加えて、有馬という地が結び付けているようにみえる。兵庫県有馬郡は、多くの人士が福澤諭吉から強い影響を受けた地域で、白洲次郎の祖父退蔵も三田町の出身で、福澤門下生であった（NPO法人歴史文化財ネットワークさんだ 2014）。

今回の「なにわ大阪と本山彦一」研究プロジェクトでは、その研究の成果と共に、さらに解明できない課題を見出すこととなった。これからも取り組んでいきたいと考える。本稿は、2018年度・2019年度特別研究「なにわ大阪と本山彦一」の研究成果の一部である。

引用・参考文献

- 有馬会 1903「有馬会会員名簿」『有馬会雑誌』第10号
 九鬼隆一 1900「地方博物館設立の必要なる理由」『有馬会雑誌』第5号 有馬会
 九鬼隆一 1929『達磨心論』
 大阪毎日新聞慈善団 1931『大阪毎日新聞慈善団二十年史』大阪毎日新聞慈善団
 関西大学なにわ大阪研究センター 2020『なにわ大阪と本山彦一』
 関西大学博物館 2010『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』関西大学博物館
 故本山社長伝記編纂委員会 1937『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社
 故本山社長伝記編纂委員会 1937b『松陰本山彦一翁遺稿』大阪毎日新聞社
 斎藤康彦 2012『近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家たち』思文閣
 三田博物館 1915～1917『三田博物館出陳図録』3巻 抄本1巻
 末永雅雄 1935『富民協会農業博物館本山考古室要録』岡書院
 高橋眞司 2008『九鬼隆一の研究：隆一・波津子・周造』未来社
 田中芳男 1891『有馬温泉誌』
 田中芳男 1900『農業館列品目録』神苑会
 司良一 2003『男爵九鬼隆一：明治のドン・ジュアンたち』神戸新聞総合出版センター
 角山幸洋 2004「有馬竹細工の盛衰」『関西大学経済学論集』第54巻第3・4号合併号 関西大学経済学部
 NPO法人歴史文化財ネットワークさんだ 2014『さんだ人物誌』
 西村健吉 1937『財団法人 富民協会十年史』財団法人富民協会
 西村健吉 1933『富民強身』明文堂
 藤本亮助 1951『兵庫県近世五十傑伝』
 本山彦一 1927『財団法人富民協会設立趣意書』
 矢野憲一 1979「田中芳男と神宮農業館」『國學院大學博物館学紀要』第4輯
 山口卓也 2011「本山コレクションの由来」『関西大学博物館蔵 本山コレクションの由来』関西大学博物館
 山本哲也 2010「九鬼隆一」青木豊・矢島国雄『博物館学人物史（上）』雄山閣

（やまぐち たくや 関西大学博物館学芸員 「なにわ大阪と本山彦一」研究分担者）

